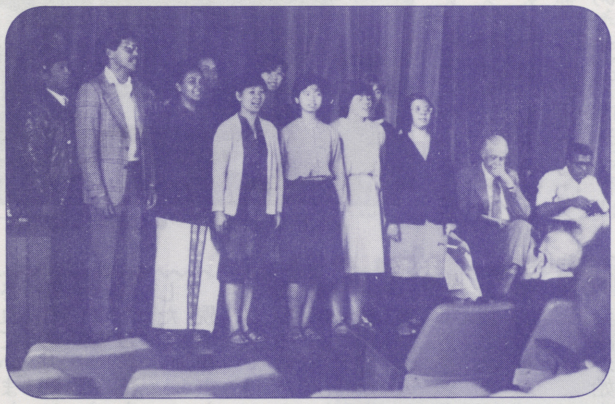
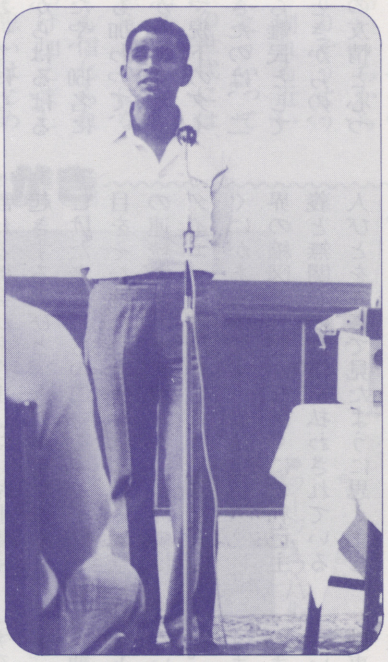
IMAJ ニュース No. 44
(社)国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和61年3月15日
発行所　(社)国際MRA日本協会
発行者　高瀬正二
頒価　1部200円
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN
〒113・東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-821-3737(代)

DIALOGUE ON DEVELOPMENT VI

第6回『開発のための対話』開催さる（1月インド）





1月4日～11日に、インドはパンチガーニのMRAセンター「アジアプラトー」で、第6回めになる国際会議「開発のための対話」が開かれ、25ヶ国から220名の参加がありました。農業や産業の役わりは、世界の必要にこたえていくことにあり、実質的で効果のあがる開発のためには、まず内面の心の開発が必要である、との声が多く聞かれました。またチベットのダライ・ラマ猊下（げいか）を二日間お迎えし、講演をしていただきました。

『パンチガーニ考』

高橋　千恵

「開発」を考える国際会議といっても、けっして専門家だけの集まりではありません。子供から年輩の方がたまで、多数参加していました。むろんみな飢餓や南北問題その他に心を痛め、その解決のための努力をしたいという点では同じです。

「心の問題やイデオロギーを論じる前に、飢えた人間に食べものを与えることから始めるべきではないですか？」――この質問に答えて、インドのある人はこういいました。

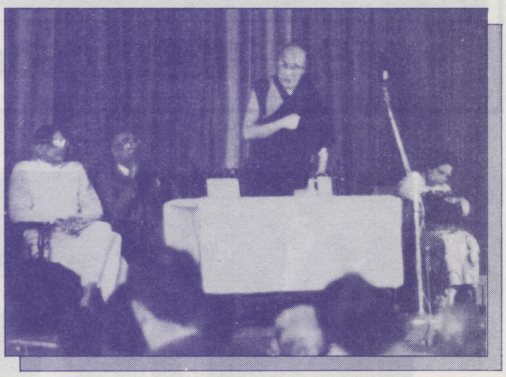
「現在、インドには開発を妨げている三つの問題があります。

①宗教・カースト制度・人種。そして貧富の差などによってインドはことごとく分裂しており、すぐれた頭脳や人材を一か所に集めて働かせることは不可能である。

②汚職がはびこっていて、海外からの援助金の多くが途中で誰かのふところにはいってしまう。

③適切な人材が選ばれずに、地位が高い人の親せきや知りあいが仕事をえてしまう。

今のままでは、外国から食糧を買って国民に充分食べさせることすらできません。ですから、インドの真の発展のためには、MRAのいう『人間の開発』をおし進めることがまず必要なのです。」



●ダライ・ラマ猊下の講演

ダライ・ラマ猊下がおいでになった二日間は、遠くの村からはるばる集まった仏教徒の方がたや、150名にものぼる警備の人たちも加わって、センターはあふれんばかりでした。このたびのダライ・ラマ猊下のダイアローグ参加が実現できたのは、二十六年前にチベットから難民としてインドの土を踏まれたときからの、MRAの人たちの長年の友情と心づかいのたまものだということです。きさくで、[illegible]をたやさず、またうらみがましい言葉の一つもおっしゃらないところに多くの人びとが魅了されていました。「心の平安が世界の平和の基礎になります」と、愛、あわれみ、そして許しの大切さを説かれたお言葉を、みな深くかみしめました。

猊下が去られたあとは、なごやかなふんいきの中で、自然に楽隊と会議参加者との交流会となり、何曲か演奏してもらいました。暴動続きで一般市民から疎遠になりがちだという警察の人たちが、「自分たちの仕事に敬意を表され、感謝までされたのははじめてです。」といった言葉が印象的でした。

会議が始まる前に、このたびはマザーテレサで知られるカルカッタを訪ねる機会がありました。路上で寝起きする人びと、人力車をひくやせこけた老人、ものごいをする子供と、目をそむけたいような痛ましい光景の連続です。そう遠くない世界では、ダイエット食品がもてはやされる国ぐにがあるのです。混迷する第三世界の縮図と、豊かな国ぐにの利己主義と無関心の代償を払わされている人びとをここで見たように思えました。

しかし、孤児院では捨て[illegible]った子供たちの人なつっこいキラキラした目にふれて、救われるような気がして、生まれてくる子供たちすべてが祝福されるような世の中をつくっていかねばと思いを新たにしました。今の私には、大きいことをしていくような技術も財力もなければ、へき地に井戸を掘りに出かけていくような勇気もありません。しかし、私なりにきっと役割が与えられていると信じます。今もカルカッタを思うたびに、自己憐憫が消え、背すじが伸びるような気がします。縁あってむこうの状況を知ることができたのですから、他の人びと、特に日本の方がたにも知っていただく努力をしましょう。要領よくなくともいい、誠実な生き方をしましょう。そして、前向きの姿勢で問題にとりくもうとする人の輪を広げていきたいものです。

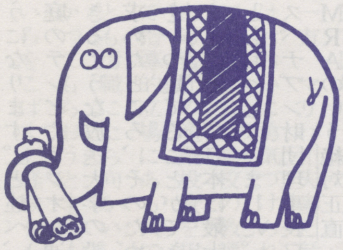
神さまは、わざと日本に小さな国土と少ない資源を与えられたのではないか、と最近思うようになりました。他の国に頼らなければ生きていけませんから、外に目をむけざるをえませんし、おごりたかぶるわけにもいきません。インドでも日本の小型車がさっそうと町を走りはじめ、注目をあつめています。日本と聞けば、子供が即座に「エレクトロニク

● カルカッタ郊外のボーイズタウンにて――農場で共同生活する150人の男の子も、もとはマザーテレサにひろわれた捨て子たち

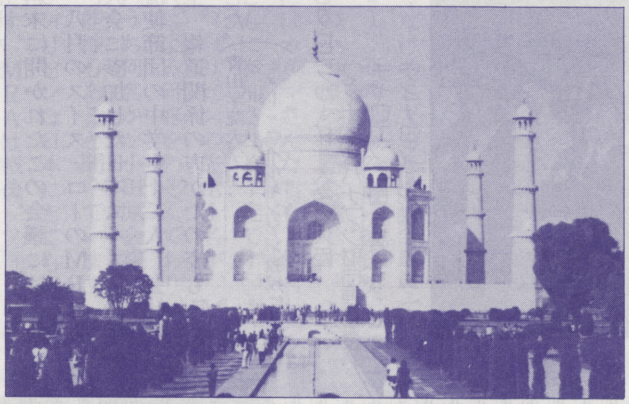
ス！」、「技術大国！」と答えるほど、日本は賞賛の的となっていました。期待されている時だけに、相互依存が正しい方向でおしすすめられていくよう見守りたいものです。

香港からは、若い女性が二人参加していました。戦争の傷あと深い地域からきているだけに、うち一人は反日感情がときおり頭をもたげて、おさえるのがつらそうでした。なぜ、蔣介石総統が、日本に対する賠償権を放棄したり、中国にいた日本人をすんなり帰したかわからない、日本が今、富を享受しているのに、苦しんだ中国が未だ遅れたままなのは不公平だとも言いました。私とは同室で、いろんな話をする機会もあり、初日の出をおがもうと暗いうちから丘へのぼったときは、よりそうようにして暖をとりました。別れも近いある日、この二人が私にこういってくれました。「やはり次の世代には、うらみやねたみなどではなく、いいものだけを伝えたいと思うようになったの。」「そして自分でも信じられないんだけど……」とつけ加えました。「日本語を学びたいと思いはじめたの。中国民族の真の統一を考えるとき、日本がはたしてくれる役割は大きいと思うから。」小さいながら一緒に橋をかけることができたという喜びと同時に、日本にかけられている期待の大きさに身のひきしまる思いがしました。

こんな時だけに、次回の会議には一人でも多くの方がたが日本から参加して下さることを祈るものです。



パンチガーニおぼえがき



●タージ＝マハル

（会議の発言から）

貧しい国、豊かな国の違いはあっても、
※相互依存が強まるこの地球は１つのボートのようなもの。「ボートのそっち側が沈みかけていますよ！」といって知らんぷりはできないのが現状。

一人がやれることは小さいかも知れない。しかしたとえ
※一滴の水でも数があつまれば、やがては川もながれはじめよう。

やはり農業に一生をささげた父の口ぐせはこうでした。
※「永久にもたせるようなつもりでこの地をたがやそう。明日死をむかえるようなつもりで今日を生きぬこう。」

（農業のセッションでカナダ人の発言から）

関西大会報告

十月一二～三日にかけて、神戸で開かれた「第八回MRA関西秋季大会」には、百二十名以上の方がたが参加しました。テーマは「混迷のなかに希望を――相互依存から相互貢献へ」。プリーダ・パタナブト大学省大臣をはじめとしたタイからの五名の姿もみられました。

「先進国の条件を求めて」という分科会には、元建設大臣の野田卯一氏も参加され、日本からのタイへの援助を有効なものにするにはどうすべきかについて活発な討議が行なわれました。

タイ代表は、「日本からの援助の多くは大規模なものが多く、結局すべて日本の建設会社が受注してしまうことになり、タイの会社の助けにはなっていない。また、金利差があるため、タイの日本企業がどうしても優利になる。」として、「タイ企業が受注できるような小規模な事業での援助をもっとお願いしたい。」と訴えました。野田氏はそれにこたえて、「現状を深く恥じ、改善のための道を求めていきたい。」と述べられました。

プリーダ大臣は、「より多くの学生が大学へ行けるようになれば、タイは豊かな資源を有効につかうことができるようになります。」と述べ、タイ人が家庭のテレビやラジオを通じて勉強できるような放送大学の設置を日本に求めたところ、そのためのセンターを一つ建てることができたとして、タイにとって日本は最大の援助国だともおっしゃいました。

タイのスパナプン財団理事長ワタナ氏は、MRAのいう絶対正直・純潔・無私・愛の四つの原則は仏教の哲学に共通するもので、「人がそれぞれに心の平安をみいだせば、世界平和に近づくことができる。」とつけくわえました。「タイとその近隣諸国、特にカンボジアとの間には、利害のからんだ対立や戦争がおこっています。この地域の平和の鍵はタイが握っています。」「平和とは、たんに戦争がない状況をいうのではなく、人びとの幸福や生き方の質もそれにかかわってきます。」

東京の和田リエンさんは、昨年亡くなられた歯科医のご主人のことを話されました。――「ある日主人は、処罰されることを覚悟で税金を正直に申告することを決心しました。社会の汚職や不正の問題に、解決の道を見い出したかったからです。この行動が歯科医の世界にちょっとした嵐をまきおこしました。税務署は、長年にわたって納の税金を正直に申告した主人にどう対処していいかわかりませんでしたし、そのための用紙もなかったのです。結局は、一年分だけの追徴で許してくれました。税務署の上の人がこう言ったそうです。『せめて半数の人たちがあなたと同じことをしてくれたら、税金はかなり下がるんですけどねえ……』――和田夫人は、ご主人にならって自分も正直に申告していくつもりだと述べました。

週末に開かれたこの会議には、他に、八月のスイス・コーのMRA世界大会に参加した日本スイス青少年交流使節団の中学生十二人、会社員、学生、報道関係の方がたの姿もみえました。（青山学院大学　ヒュー・ウイルキンソン教授による）

●（右から）プリーダ　大学省大臣
ワタナ　スパナプン財団理事長
チャロエン　国会議員
ティナコン　前国会議員

第二回通常総会報告

さる十二月十四日(土)、東京の憲政記念館にて、社団法人国際MRA日本協会の第三回通常総会が開催された。高瀬会長の挨拶のあと議事に移り、昭和六十一年度事業計画、並びに昭和六十一年度収支予算が、事務局原案通り可決された。（書類別添）

続いて第二部の文化講演会に移り、日本大学の青木一能助教授より「アパルトヘイトと南部アフリカの情勢」のテーマでお話願った。

南部アフリカにおけるアパルトヘイトの歴史的経緯から、今、殊に問題となっている南アフリカ共和国での動きなど詳しく解説して下さった。最後にローデシア（現ジンバブエ）に停戦をもたらそうと、各派間の信頼作りのため活躍したMRAの働きに言及され、現在の状況を好転させるためのMRAの一層の活躍を願うと結ばれた。

フィリピン訪問記

ジェフリー・クレイグ

マニラまで、成田から飛行機でたった三時間ほどとはいうものの、フィリピンは日本とはまるで対照的な国です。フィリピンは平均所得がアジアでも最も低く、失業率も高い開発途上国です。一九八三年八月におきたベニグノ・アキノ氏の暗殺以来、開発はますます遅れ、国は深刻な経済・政治問題をかかえています。最近は共産主義運動も急速に拡大し、国の安定をおびやかしはじめました。しかしながら、マルコス氏が去り、アキノ夫人が大統領に就任して、新しい時代が到来しました。

フィリピンの将来のためにMRAとして何かお役に立ちたい――それを友人達と相談するために、私は十一月に十日間マニラへ行き、オーストラリアのスターン・シェパードさんと合流しました。シェパードさんはメルボルンにある「アーマ」というMRAセンターの責任者で、アジアでの経験も豊富な人です。私たち二人を迎えてくれたのは、旅行社を経営するダンテ・カルマ夫妻でした。ご主人はフィリピンの旅行産業発展のために要職を歴任した人で、学生だった一九五〇年代にMRAにであいました。私たちはカルマさんの娘さん夫婦宅に泊めてもらいました。二人とも同じ旅行社で働いていて、ご主人の中山さんは日本人、奥さんは上智大学の卒業生です。

フィリピン滞在中は、実業界、教育界、政界そして労働組合や公務に携わる方がたにもおめにかかることができました。そのうちの一人は、国家警察委員会の委員長で、全国の警察官五九、〇〇〇人の頂点に立つ人です。この人の心配の種は、一部の警官による職権の濫用で、それが人びとを共産主義に走らせる結果になってしまうということでした。

しかし一方、マリバイ夫妻と話をした時はおおいに勇気づけられました。ご主人は公立学校の教師、奥さんはある官庁の産業投資を担当する課で指導的立場にある人です。二人とも汚職にたち向かい、便宜をはかってもらおうとする人びとのわいろをこばんだ経験をもっています。ご主人は私たちに、有名なフィリピン国立工芸大学で学生三〇〇人と職員の方がたに話をする機会を与えてくれました。

新政権も多くの問題をかかえています。この国の発展の基礎となるような高い道義的・精神的な水準をあえて求めようとしている人たちを励ますために、私たちはできるだけのことをしていくべきでしょう。そのためのよい機会が、五月の小田原の国際会議です。これにはカルマさんたちも、何名かとともに参加される予定です。また、フィリピンの先生十名が、MRAによる研修をのぞんでおり、そのうち何名かが小田原会議にくる可能性もあると聞いています。

フィリピンは日本にとても近い国です。MRAは戦後、フィリピンの日本に対する憎しみをいやしたことで、両国の歴史において重要な役わりをはたしました。いま再び、日本とフィリピンが協力しあって人を育て、また道義的・精神的資源を開発することで、アジアと世界のために役立つ機会が訪れたといえます。

（後列、左から）
マリバイさん
スターン・シェパードさん
ジェフリー・クレイグ氏（筆者）
ダンテ・カルマさん
（前列、左から１人おいて）
マリバイ夫人と２人の息子さん
バルボア夫人（フィリピンMRA財団の会長）

1986年　MRA国際会議のお知らせ

国境をこえた思いやりの心を

- アジアの課題と希望
- 世界の必要にこたえる産業の役割
- 生きがいを与える家庭・教育

小田原会議
5月2日(金)～5月5日(月)
於 小田原アジアセンター

関西プログラム
5月7日(水)～5月12日(月)

関東プログラム
5月13日(火)～5月20日(火)

さまざまな問題への答を、各国から参加する代表の方がたとともに考え、話し合う機会です。第10回めをかぞえるMRA国際会議へ、明日への大きな希望を求めてあなたもご参加下さい。

子供を伸ばす

お母さんの心理学訓練講座

昨年の3月と11月に、東京・田端のMRAハウスで開かれた「母親講座」は、大変好評をえました。

今年も、当協会主催で開講します。お子さんのこと、あるいは人間関係にお悩みの方は、ぜひご参加下さい。くわしくは、当協会事務局へ――

- 日　時　昭和61年3月10日(月)
  17日(月)
  24日(月)
  31日(月)
  10時―13時
- 場　所　社団法人
  国際MRA日本協会
  (TEL 東京03―821―3737)
- 定　員　20名
- 受講料　10,000円
  (テキスト他諸費用含む)

講　師　山崎　房一 先生

神は私たちに

2つの耳と

1つの口を下さいました

なぜ私たちは、

はなすぶんの2倍

きこうとしないのでしょう？

今、一番いいことをしよう

母親講座講師
陽光学院々長　山崎　房一

MRA精神を実践するとき最も大切なことは、「静かに心の内なる声を聴き、その声に導かれて生きる」こと――即ちガイダンスにしたがうことです。

母親講座では、そのことをもっとわかりやすくするために、私は『今』という詩を書きました。

『今』

今、一番いいことを
　　しよう
将来に不安や心配ごとが
　　あっても
将来がやってきたら
そのとき一番いいことを
　　すればいい

あのとき
ああすればよかった
　と思うことをやめよう
あのときいちばんいいと
　思ってやったのだから

母親講座[illegible]生のSさんから、次のような手紙がとどきました。

山崎先生、私は夏休み中に人身事故をおこしてしまいました。それは、あっというまのできごとでした。国道を右折した際、車の左側前方に自転車がきたと思ったら、人間が宙をとび、車の右側に落ちました。私は、「やった」と思いました。

その人のそばにかけより、意識があることを確めましたが、頭からは血が流れていました。近くの家へ行って、救急車と警察を呼びたい旨を伝え、「家の入口の日陰にけが人を座らせてあげてほしい。」とお願いしました。競輪の選手のような格好をした男の人でした。「気分は悪くないか」と何度も聞くと、「大丈夫です。」と答えてくれ、声がしっかりしていたので少し安心しましたが、頭の傷が気になりました。車に乗っていた息子に、「お母さんは、このお兄さんにケガをさせてしまったから、少し待っていてね。」というと、とても静かにしていてくれ、一度も「早く帰ろう。」とは言いませんでした。

被害者は病院へ運ばれ、私も現場検証のあとそちらへむかいました。治療を待っている間、その方のシャツが切れているのに気づき、買ってきてさし上げました。息子[illegible]人に預けにいきました。

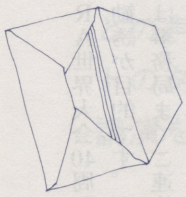
警察での事情聴取の時には、「私は四輪車で、相手は無防備な自転車でした。きずの大小にかかわらず、私はMさんに対して最善を尽くします。」と言いました。Mさんが電車で帰られる前には、スーパーで着替えを購入し、切符を買い、さしあげることのできなかった昼食の分のお金も添えて、改めて謝罪をして別れました。

私は、先生の『今』という詩が大好きです。「今を一生懸命生きること」、「その時その時に完全燃焼すること」、「こだわりを捨て、現実をありのままに受け入れること」を、身近に起きるできごとの中で応用してきました。しかし、この日ほど「今」を大切にしたことはなかったように思います。「今、私にできることは何か」と心の中で考えたとき、次つぎと、まるで以前から決まっていたことのように浮かんできたのです。問題に直面して一生懸命に対処しようとした時、損得勘定などは私の心の中にありませんでした。ただ被害者の方に、できうる最高の償いをしたいと思っただけです。

先生は、成功よりも失敗から学ぶものが多いとおっしゃいました。私にとって交通事故はもちろん大失敗でしたが、「今」を完全燃焼させたこと、頭をからっぽにし、「今」を生きることができたのは、Mさんには申し訳ありませんが、すばらしい経験でした。

事故を起こしたあと、私はおちこみませんでした。夜、ふとんの中で「おまえはよくやった」と百点満点をつけたのをよく覚えています。一生懸命生きたら百点なんですね。逆境の中でも大丈夫という自信がつきました。先生の講義を受けて、自分自身のことがよくわかるようになりました。

最近祖母が亡くなったときは、高血圧の父を気づかい、悲しみを察してあげることもできました。昔は憎んでいた父と、今こうして心を許し合い相談し合えることを、先生のおかげと思わずにはいられません。昨年五月に初めて講座を受けた頃の自分とは、別人のように思えます。友人は皆驚き、喜んでくれます。今、自分が幸せのまん中にいることを実感しています。どうか母親講座がいつまでも続きますよう願っています。



「このくらいはいいだろう、という考えと仲よくなってはいけない」チベットのことわざにこういうのがあるとか。われわれの社会通念として、このことわざに反することが平気になっていないだろうか。

今年の一月にインドで開かれた「第六回・開発のためのダイアローグ」では、ダライ・ラマ猊下が基調講演をされた。チベットから難をのがれてインドへ来られて二十六年、今では世界の精神的指導者の一人として広く尊敬され、影響を与えておられる。世界の秘境としてしか知られていなかったチベットを、現代世界に与える重要な精神の源として改めて見直させているのも、猊下の人柄に負うところが大きい。その人柄は、修行と信念のたまものである。「われわれの戦いの場は外にあるのではなく、われわれの内にある。怒り、自負心、人をやっつけようとする心こそが敵である。」とも言われる。

古来からのこうした教えは、耳にタコができるほど聞きあきているが、少しでも生活にいかすことができれば個人の幸せ、ひいては社会の善化への道があるのではなかろうか。

誰でも長い人生の間には何度か反省もし、やり直そうと心に決めることがあるものだ。それをどうしたら持続させることができるのだろう。その辺に鍵がかくされているようである。

信じたこと、心に決めたことを忘れないようにするのは念力によるという。念力、すなわち「祈り」ということである。くり返しくり返し心に言いきかせるために、毎日きめた時間をとることが現実的であろう。静かに心にひびいてくる「声」に耳をかすこと。これは洋の東西を問わず、表現とことばの違いはあっても多くの人によっておこなわれてきている。

一人ひとりの力は小さいが、心を澄まして大宇宙（神）と結ばれる時、秘められた幸せが、力が与えられる。「静かな時」を朝早く、定期的にもち、心を澄ませて「心耳」を傾ける。ここにガイダンスの秘訣がある。チベットのことわざをもう一度思いおこそう。

神なくしてわれわれには何もできない
われわれなくしては神は行なわない
（聖オーガスチン）

●お知らせ●

◇昨年の小田原国際会議がきっかけとなって始まった留学生との交流会は、毎月第三日曜日に午後二時から田端のハウスで開かれています。二月はルクセンブルグのブルック・クリスティアンさんが、来日一年でマスターした日本語を器用にあやつって、お国の紹介をしてくれました。年れい制限なし、参加資格問わず！友だちの輪を広げるつもりでおいで下さい。

◇おなじみノルウェーのイエンツ・ウイルヘルムセンさんが3/16～4/4の予定で来日されます。今夏、スイス・コーのMRA世界大会40周年記念大会への勧誘が目的です。面会御希望の方は事務局までご連絡下さい。

◇毎月、婦人会（東京）、東京月例会、関西月例会が開かれています。次回の関西月例会は3/24(月)午後六時、東京月例会は3/29(土)午後二時で、共にイエンツさんをゲストでお迎えします。

◇4/5(土)の午前十時から、田端のハウスで恒例のバザーを開催します。ご協力とおいでをお待ちしています。

心にのこることば

死の数ヶ月前、作家のジョイス・ケアリーは体がマヒして動かなくなり、話すこともできなくなりました。口述筆記も無理で、意志を伝えるためにはペンを手にしばりつけ、苦労して字を書かねばなりませんでした。

ある日、彼はこう書きました。

――私にとって人生とは、神からの贈りものである。自分の力で手に入れたわけではないこの人生に、別れを告げようとしているこの期に及んで、今さら不満をいえる権利など私にはない。――